



花一会図書館便り

10・11月号（令和4年11月1日発行）



Facebook



Instagram



Twitter

第8回

「郷土探索への道 黒沢温泉編(番外編②)」

「K」こと黒澤龍雄の位置

「郷土探索への道 黒沢温泉編 番外編②」は、公益財団法人北海道文学館 学芸課長 苫名直子氏を講師に招き、「K」こと黒澤龍雄の位置～もう一つの「生れ出づる悩み」と題して開催した花一会図書館講座の概要についてお報せします。

講師の苫名直子氏の黒澤龍雄との出会いは、北海道立文学館に所蔵してあった一枚の絵葉書(裏面 図-1)だったそうです。その絵葉書は、学業のため上京していた木田金次郎が黒澤龍雄なる人物に送ったものでした。当時木田は15歳でした。有島武郎の著書『生れ出づる悩み』の主人公のモデルになった画家木田金次郎、そして「K」なる登場人物のモデルとなったのが黒澤龍雄でした。木田と有島の出会いは、現在の北海道大学美術部の展覧会に出展されていた有島の油絵に木田が感動して有島の家を訪ねたことでしたが、その時、黒澤龍雄も同行していたようなのです。

黒澤龍雄は、岩内町の医者の子に生まれ育ち、木田金次郎の同級生で親友でした。小学校卒業後、木田は上京するも黒澤は上京を断念し札幌の中学校へ進学します。岩内町へ戻り様々な文芸誌に作品を投稿し、道内外の作家や画家と交友を広げながらも、昭和初期に若くして表舞台から去り、祖母が営んでいた蘭越町字日出の黒沢温泉で隠棲するのです。

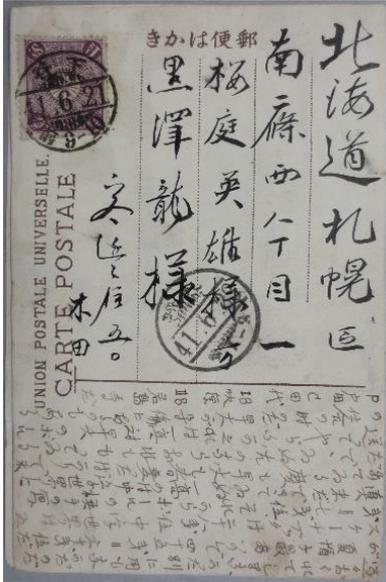
黒澤の交友関係は広く、道内の画家仲間では小樽の山崎省三、中村善策らがあり、彼らは後に北海道美術協会展(道展)を作ります。画家三岸好太郎からは、絵葉書(裏面 図-2)が残されています。そこには当時俳句の同人誌に投稿していた黒澤を意識してか、三岸自身が詠んだ当時新傾向であった自由律の俳句が書かれていました。代表作「田園の憂鬱」の作家佐藤春夫とは深く交流があり、その延長線上で「細雪」の谷崎潤一郎や「島の娘」の作詞で知られる長田幹彦との交流があったのではと推測されます。黒澤が隠棲していた黒沢温泉は昭和49年に火事で全焼しています。もし現存していれば、そこには先に名前を挙げていた人たちからの手紙や葉書が残されていたかもしれません。

黒澤龍雄という人物は、これらの人たちにとってどのような存在だったのでしょうか。画家木田金次郎にとっては芸術の理解者で心のよりどころであり、代表作「海のまぼろし」の詩人沙良峰夫にとってはどうしても意識せざるを得ない同郷の先輩であり、画家三岸好太郎に対しては文学や俳句に眼を向けるきっかけ与えることになったのでしょうか。最後に、道産子による文学の歴史が黎明期だった当時、作家の登竜門であった文芸誌に作品を投稿し掲載されていた黒澤は、直接の交流はなくとも、道内の文学志望の若者や作家の卵たちの憧れの的になっていたのではないのでしょうか、という言葉で講座は締めくくられました。

講座で紹介された画像を一部公開！

(許可を取って掲載しています)

図-1



木田金次郎「黒澤龍雄宛の葉書」/1908(明治41)年
北海道立文学館所蔵
裏面は一高(東大)対早大の野球の試合の写真

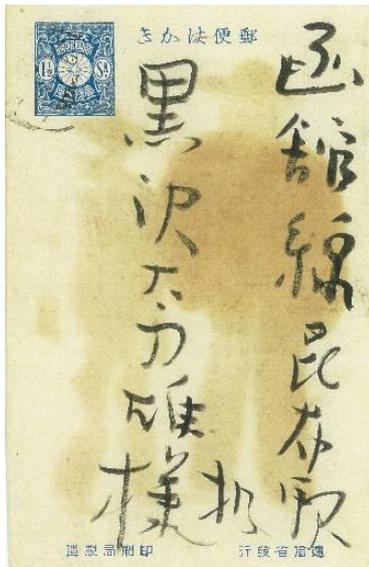
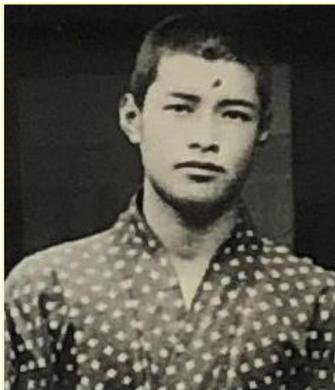


図-2

三岸好太郎
「黒澤龍雄(太刀雄)宛の葉書」
木下義章氏蔵

宛先住所は「函館線昆布駅」
裏面には「しぐれて来たりスケッチに出た七日、(新傾向の句ですぞ) 銭函にて」と書かれている

黒澤龍雄(拡大)



黒澤一家/1912(大正元)年撮影
提供:石黒浩二氏(黒澤龍雄の甥)

後列左端が黒澤龍雄、右隣が父・代次郎

